

# 修 士 論 文 要 旨

学籍番号 21GH203 第 号

氏 名

人文社会科学 専攻 (コース: 現代共生 )

対馬 登志子

論文題目

グローバル化やメディアの進化に伴う会話離れ及び方言の衰退について

メディア機器の保持や使用の低年齢化が家庭内や友人同士の挨拶や会話にも影響を及ぼしていることが社会現象化している。本論文では、社会情勢の変化やメディアの機器の進化が方言主流地域に住む人々の、「方言や共通語に対する意識やイメージ、方言の使用や認知度」にも変化を与えていると思われる実態を明らかにしていく。本論第一章では、主要調査である地域や方言、共通語に関する意識、方言の使い分け、方言の使用と認知についての調査(つがる市内中学生と保護者対象)と、2008年に自身が実施した同調査結果の比較から異動・現状を明確化していく。第二章では補助調査1として行った同中学生の「挨拶ことばについての意識と現状」についての結果から社会や家庭環境の変化の影響について述べる。第三章では補助調査2として、社会環境等の変化に伴う方言使用の実態に微細でも関連を見出さたく、青森放送「津軽弁の日」に投稿(川柳・短歌・俳句)の収録集から方言を記録、投稿者地域、多用されている方言語彙を資料として作成した。第四章は各省庁や調査機関で実施の子供たちとインターネットの関りについての調査研究からメディア機器の保持や使用の実態について、第五章で弘前大学大学院医学研究科と市教育委員会で調査した新型感染症による措置がメディア環境の拡充となる懸念、子供たちの生活や言語面に与える影響について触れている。

調査対象としたつがる市木造は、2005年2月に一町四村が合併、青森県9番目の市として誕生した市の中心部に位置する地域である。小さいコミュニティの崩壊、少子高齢化、人口の減少も進み、方言を主流とする地域であるが若年層に特に共通語化が広まり、方言話者、方言の担い手はいるが、方言が伝承されなくてきている地域と思われる。主要調査結果から予想していたことは、当時(2008年)より、地域や文化、方言に対する好感度が低下し、方言の使用・認知が極端に減少、若年層にその傾向が顕著にみられるのではないかとということであった。前回の調査結果では、全年代が共通語より方言の好感度が高い結果であったが、今回の調査では共通語の好感度の上昇が若年層、50代以上にみられた。方言と共通語の使い分けに関しては、誰にでも方言を使う若年層は、前回の調査より一割近く減、「方言は絶対使わない」と答えている割合が中学生男子に多く見られた。保護者世代も誰にでも方言を使う割合が若年層同様全体的に減少、特に50代以上の割合が激減した。また、方言の使用や認知に関する調査では全体的に使用の割合が減少、現在も使用や認知度の高い方言語彙を前回の結果と比較してみると、若年層よりも保護者世代に使用や認知の下降幅が大きいことがわかった。

今回の調査地域では、若年層を含めた全世代に方言使用者が減少、緩やかではあるが共通語化も広がりを見ていることも否めないが、十数年の時間を経ても地域や文化、方言に対する愛着は上向きであり、全国調査と比較してみても方言の使用や使い分けの割合は高いことがわかった。本調査結果が方言の見直し、方言の保存、継承につながる足がかりや資料作りの一助となるよう、地域の中で更に丁寧な研究を継続したいと思う。